

# わが国の索道の歴史を開いたパイオニア企業が 新提案に挑み、スキー場の競争力をリードする。

安全索道株式会社



<http://ansaku.jp/>



新線の、黒部立山アルペンルート「立山ロープウェイ」(2015年5月客車設備リニューアル)

## 大阪生まれ滋賀育ちの 100年企業

索道とは、空中に渡した索条(ロープ)にゴンドラ等を吊り下げて、人や貨物を運ぶための輸送施設のこと。鉄道に比べて地形の影響を受けにくく、急斜面に強いため、山間の観光地へ行楽客を運ぶロープウェイやケーブルカー、スキー場のリフトといった分野で活躍している。

大阪発祥の安全索道株式会社は、1915(大正4)年の創立以来、わが国の索道の歴史を切り開いてきたパイオニア企業だ。現存する国内最古のロープウェイとして、「一般社団法人日本機械学会から「機械遺産」に登録された奈良県・吉野山のロープウェイ(29年架設)をはじめ、海拔2612mの高所に架けた中央アルプス駒ヶ岳のロープウェイ(67年架設)、国内初の12人乗り

を実現した長野県野沢温泉スキー場のゴンドラリフト(90年架設)など技術的難易度の高いプロジェクトを次々と達成。索道という輸送手段をわが国に定着させる大きな役割を担った。

私たちに身近なものとしては、びわ湖バレイや奥伊吹スキー場のリフト、八幡山ロープウェイがあるほか、70年の大阪万博会場内のロープウェイや「動く歩道」も同社が手掛けた。

創業100年を超える歴史の中で全国の観光地やスキー場に残した足跡は計り知れず、国内で現在稼働中のロープウェイの実に5割、リフトの3割は同社が架設したものだという。

## スキーブームが去った後に

### 「事業モデルの大転換」を敢行

輝かしい歴史を刻んだ同社だが、バブル崩壊以降には、事業モデルの大転換を

迫られた時期があった。「原因はバブル期の爆発的なスキーブームが引いた後の反動だ。スキーヤーが殺到した時代、全国のスキー場はリフトの輸送能力と快適性のアップを図って、競うように新設やリニューアルを実施した。当社にも多い年で年間70基以上という数の新設依頼が殺到。しかし、そのブームが終わると、国内のスキー場のどこにもリフトの新設需要がなくなってしまう、さらに最盛期の3分の1以下となったスキー人口の減少が追い打ちをかけた」。

西川正樹社長が語るように、それまで索道業界の成長を牽引してきたリフト架設需要が、その時期に成熟状態に達したようだ。もう一つの柱のロープウェイは高度成長期の昭和30年代から40年代にかけて、現存する実に80%以上が集中して建設された。多額の費用を要することや環境保護の観点から



純国産技術で作られた新型握索装置

メーカー以外がメンテナンスすることは難しい。

「1世紀にわたって国内各地に先人たちの残した実績が、メンテナンス業務中心の体制へ移行した当社にとって文字通りの「財産」になった。同時にさまざまな経営努力にも取り組み、数年間で良好な財務状態を維持できるようになった。転機は3年ほど前から訪れた。外国人観光客が、スキー場に来場し始めた。

「施設もほとんどが30年選手になっていく。長く低迷していたリフト新設需要が少し回復しそうだ」と予測して準備に取りかかった。ニュータイプの自動循環式高速リフトの開発だ。

索条に固定するタイプのリフトに比べて、高速運行が可能な自動循環式は、長距離を速やかに移動できるとあってバブル期に人気を博した。しかし、固定式より設備費用がかさむため、この20年間は新設案件が途絶えていた。それに、ス

キー客の回復といっても、もはやバブル期までは見込めない。目指したのは「これからのスキー場経営に貢献できる」新製品だった。索条をつかむ握索装置(グリップ)を旧型と混在できるように設計。単年での全面更新を望まないスキー場なら、数年がかりで更新できるプランも選んでもらえる。さらに、維持管理コストを抑えるために、全体の部品点数も少なくなった。

## いまや地域資産となった索道を 後世へ伝える努力を続けたい

「トラブル時の対応でシーズン中にリフトを止めたくないスキー場の事情を考えて、部品手配などで迅速な対応ができる純国産にこだわった。欧州の技術を組み合わせる場合に比べて開発には苦労したが、末永く安心してお使いいただける新製品ができたと自負する」。20年のギャップを埋めて、「いまの時

流に適合する新スペック」を設備の更新意欲があるスキー場へ提案することが、西川社長の狙い。新製品を年内に発表する準備を進めている。

その一方で、メンテナンス業務にも一層注力していく構えだ。「外国人観光客増加のおかげで、北海道の函館山など当社が手掛けた人気景勝地のロープウェイの稼働率が軒並み上昇。国内各地に当社が残した索道はいまでは地域の資産であり、それを後世へ伝える役割を担い社会に貢献していきたい」。



索条を支える滑車の調整

### Profile

#### 安全索道株式会社

- 本社/守山市勝部町471-5
- 設立/1915年
- 資本金/1億円
- 従業員数/約100名
- 事業内容/ロープウェイ、ゴンドラリフト、スキーリフト、降雪機、ケーブルカー等各種機械装置の設計・製作・施工、スキー場の総合レイアウト等コンサルタント業務



代表取締役社長  
西川 正樹氏

### Voice

創業地大阪市から1977年に水口町(甲賀市)へ全面移転して以来、滋賀県企業としての誇りを胸に、全国各地で数多くの索道を設けてきました。法人設立から100周年の節目を越え、新たな思いで時代のニーズに応え続けてまいります。

ハードルが高くなり、最近ほとんど新設されなくなっていた。

「索道業界はレジャー・リゾート産業の盛衰と連動している。来客数が大幅に減る中で、どのスキー場も輸送力増強ニーズがなくなり、生き残り戦略を策定する必要に迫られた。この中で、安全性と快適性を求めて老朽化した施設を維持管理・改造するニーズが当社に生まれた」。

こうして、安全索道は2007年に本社および工場を、水口町(甲賀市)から守山市へと全面移転。新設需要向けの大規模工場から、保守や改造業務に対応した工場設備へ、メンテナンス需要を掘り起こす事業モデルへと枠組みを転換した。

## 次代のスキー場にふさわしい

### 新型の自動循環式リフトを開発

空中を移動する交通機関として索道はきわめて特殊な技術で構成されている。部品の特殊性もあるため、架設した